三十周年によせて

～児童・生徒・職員～

三十周年にむけて

〈記憶・継承・創造〉

たのしい富野校

富野小学校四年　上地　亮

ぼくは、富野校に一年生の三学期、登野城校から転校してきました。そのころ小学校は、三・五年の学級と六年の学級の二学級でした。教室が足りなかったので、音楽室でまき子ねえさんといっしょに勉強しました。登野城校にいたときは、一年生だけで六組も学級があって、クラスに四十人ぐらいいて、とてもにぎやかでした。

富野校にきたら、たった二人なので、さびしくてつまらないなあと思いました。それは、あまりあそびばがなく、人数がすくなかったからです。だけど、今はちっともさびしくはありません。なぜなら、五年生や六年生と相談学習をしたり、また、体育や音楽などいっしょにしているので、とてもたのしいです。

一番楽しいのは体育の時間です。走りはばとび、サッカー、ドッチボール、ボートボール、ほかにもいろいろなうんどうをするからです。ぼくが一番すきなのは、サッカーです。ぼくは赤組で、山城先生と、つねよしにいさんとくんでいます。あいては、島袋先生と、英則にいさんと、まき子ねえさんです。人数がすくないから、ゴールキーパーは先生たちです。ぼくと、つねよしにいさんと、二人がくむとよくかちます。雨ふりのときは、教室でたっきゅうをします。

音楽は、歌をうたうのではずかしいです。だけど、登野城校では、オルガンや、大だいこなど、いろいろな楽器がつかえなかったのに、富野校にきて、楽器をつかって合そうができて、とても楽しいです。

また、相談学習のときには司会者になりました。どうやってよいかわからないで、先生に聞いたり、うまくできないで先生におこられてました。

ぼくは、この四年間とても楽しかった。このように大きい学校でできなかったことが、富野校にきてできるので、転校してきてほんとうによかったと思います。

富野校は、生徒数がすくないので、これからもっと、生徒数がふえたらいいなあと思います。

小さい学校だから

富野小学校五年　上地　真喜子

二年生の三学期のとき、わたしは富野校に転校してきました。あまりにも人数が少ないので、びっくりするやら、さびしくなるやらで、なみだがでそうになりました。

登野城校では、一学期で二百人あまりの生徒がいるのに、富野校は、全校で十二名しかいませんでした。わたしの組は、たった二人です。

ワイワイガヤガヤ、休み時間はにぎやかだし、勉強時間は、意

見がたくさんでた登野城校にくらべ、ここでは鳥の鳴き声が遠くから聞こえるくらいとてもしずかだし、組の人は二人でも学年がちがうので、意見もほとんど出しません。だからわたしは、ぼんやりしていただけでした。

でも、毎日来ているうちに、お兄さん、お姉さんたちが遊んでくれたので、うれしくなってきました。

体育や音楽はみんないっしょなので、わくわくします。特に体育の時間は、先生もいっしょにするので、ますます楽しくなります。人数は登野城校よりずっとずっと少ないけれど、何をするのもみんないっしょなので、とても楽しいです。

この学校へ来て、テニスもじょうずになったし、ピアノは先生がつきっきりでおしえてくださるので、だいぶひけるようになって、今は合そうも独そうもできます。ですから、うれしくなって休み時間などにもひいています。

それだけではありません。ふえもじょうずになり、今度の八重山区音楽発表会には、中学校のお姉さんたちといっしょに出ました。たくさんの人の前にすわったとき、むねがどきどきしていましたが、「ドナドナ」という曲をふき終わったとき、大きなはくしゅがわきあがったので、うれしくなりました。

大きな学校ではできなかった、いろいろなことができる学校。なんでもじょうずになしてくれる、まほう使いのような学校。

もう三十才になったけれど、もっともっと栄えてほしいです。

たった八人でも！

富野小学校五年　上地恒芳

今度の運動会は、一人へって八人になってしまったけれど、お父さんたちに手伝ってもらって、最後までできました。

運動会はどんなものをするか、話し合いをしてから練習をしました。練習は体育の時間や、放課後しました。千変万化・リレー組み立て体そうと、一人で十種目も出るので、きつくて練習をやりたくないと思ったことがいくどもありました。特に、「子どもエイサー」は去年もしたので、今年はやりたくなかったので、練習がいやで、しぜんに体が重くなってくるようでした。でも、少ない人数なので、いっしょうけんめいしないと目立つのでやりました。

運動会の前の日、父や母たちに来ていただいて、アーチ作りや草かり、テントはりなどをしてもらいました。ぼくたちのかいた絵が、アーチのわの中では、かいたときよりもきれいに見えました。

いよいよ運動会の日、たった八人しかいない学校が、卒業生や父兄が大ぜい来てにぎやかになり、ぼくはうれしくなって、はりきっていました。

いやいや練習した「子どもエイサー」も運動会の日には、おばあさんに、「よくできたね。おもしろかったよ。」と言われ、やっ

てよかったと思いました。
最後の校歌ダンスでは、はたをふりふり高くとんだりしているとき、「ああ、今年の運動会もこれで終わるんだなあ。来年も、いろいろなアイディアをとり入れてがんばるぞ。」と思いました。
たった八人でも、力を合わせればいろんなことができるんだ。ということを知り、「やるぞ！」というファイトが心の底からわき上がった運動会でした。

のびよ！富野校

富野小学校　堀川英則

「今年、富野校は創立三十周年をむかえます。三十周年ということは、人間にたとえると三十才というピチピチした年ですね。その学校ができたころの様子を、おばあさんに聞いてごらんなさい。」と、先生がおっしゃいました。
ぼくは、さっそく聞いてみました。祖母は、こたつに入り背中をまるめ、なつかしそうに、「むかしの道はね、道はばがせまくて、ほこりだらけのガタゴト道だったよ。それに、雨がふると穴があいたり、どろんこになったりしたよ。それに母ちゃんなんかの小さいころは学校がないから、しか（石垣）の学校にいかせたんだよ。今のように車がないから、しかの人にあずかってもらって、その家から学校に行ったんだよ。また、富野に学校ができた当時は、今のように車もなく、道も悪くて交通の便もなかったので、先生方はしかから引っこしてきて、豚をかってくらしていたよ。また、校舎はかやぶき屋だったので、台風が来ると、やねはとぶし、かべはこわれるし、とてもたいへんだったよ。」と、目をほそめて言いました。
ぼくは、「昔の人は、不便な中で子供を学校に行かせるために、ずいぶん苦労したんだなあ。」と思い、今のぼくたちの通る道はアスファルトになっているし、横断歩道もあり、すごく恵まれていて幸せです。
又、台風が来るたびにこわされた校舎を、村の人たちは畑仕事をさいてなおさなければならなかったという。ぼくは、祖母の話をもっとくわしく聞いて、当時のことをぼくが大人になるまでしっかりおぼえておき、自分のはげみにしたいと思います。
去年の十一月にこわした校舎は、富野校にはじめてたてられた鉄きんコンクリートの校舎でした。その校舎がたてられたとき、部落の人たちは「もう台風が来てもだいじょうぶだ。」と、どんなに喜んだことだろう。あれから約二十年もの間、雨風にたえて来た校舎。そしてたくさんの先ぱいたちを巣立たせた校舎……。ぼくが、一年に入学してから今まで勉強して来た校舎だから、くずすときはさびしい気持でいっぱいでした。
そして今、新しい校舎ができつつあります。でもそこではほとんど勉強することなく、中学校へ行ってしまうのが残念です。しかし、これから先この校舎で多くの後はいたちが勉強し、富野校がますます大きく大きく発展していくことをねがっています。

私は知った

中学二年　堀川　有紀子

学校に入学して八年間、数多くの思い出が私の胸にきざまれています。中でも、中学生になってからのことが、一番印像に残っています。その一つに、修学旅行があります。

私達の修学旅行は、九州ということに決まりましたが、人数が少ないため、他校の生徒といっしょに行くことになったのです。その他校は川平ということになりました。

私はこれまで、川平中の生徒とは集合指導の時間以外はあまり話をしたことがなく、友達も少なかったため気のりしませんでした。でも、ほかの人が楽しみにしていろいろ話しをしているのを聞くと、やっぱり行きたいという気持になり、九州の地理を調べているうちにいろいろな事が浮かんできました。

「熊本城はどんな城なんだろう。阿蘇山はどれくらいの大きさのカルデラ火山なんだろう。」そう思うと胸がはずみ、最初は行きたくないと考えたことがうそのように思われます。

待ちに待った十一月二十九日、胸をはずませ石垣港を出発しました。心うかれて甲板などに出ていた私も、時間がたつに連れて気分が悪くなり、二日目の夜は吐きそうで、冷したタオルを頭にのせて食事も取れないほどでした。

上陸してもしばらくは酔っていましたが、しだいになおりました。お城や火山などいろいろ見学しましたが、一番思い出に残っているのは別府温泉です。血の池地獄に入った時、湯気がたちこめて中の方がよく見えませんでしたが、初めて見た時、すごい！これが温泉なのかと、自然の大きさに驚ろかされました。

竜巻地獄ではちょうどお湯がふきだす時間に合っていたので、ものすごい勢いで吹き出る所が見られ、噴水のようでとてもきれいでした。

山地獄の所にはアフリカ象がいて、そばにいた人がとても小さく見え、私は「すっごい大っきい」と思わずさけんでしまいました。

こんな大きな自然や動物にくらべ、人間はなんて小さく弱々しいのだろう。小さいからこそ決まりを守り、助け合って行かなければならない。いつも少ない人数に慣れている私は、始めは集合の時間に遅れたりしていましたが、日がたつに連れて次第に慣れていき、時間通りに動くことができるようになりました。

修学旅行で大自然にふれ、集団生活の大事さ、自分勝手な事をすると皆んなに迷惑をかけるんだという事を、身をもって知り得たことは大きな収穫であり、行って本当に良かったと思います。

とうとうやったぞ！

中学二年　砂川恵子

昭和五十七年四月二十九日、私達の富野校は創立三十周年になりました。今度の学習発表会は、三十周年記念のお祝いでもあることを先生から聞かされていたので、どういったものを発表するのか関心があり、児童生徒会でも話し合いをしました。

その結果、私達は一度もやったことのない人形劇をすることに決めました。紙を切り、はりがねをつけ、色をぬって人形が出来上ると、文館の鹿川さんにわざわざ来ていただき、人形の動かし方を教えてもらいました。鹿川さんは、初め「仲底力の鬼退治」のセリフを読みました。村人のときは目を細め、やさしそうな声をし、鬼のときには大きい声でしゃべり、仲底力のときは目を上にあげたりして、登場人物になりきって話しているのを見て、私は感心しました。

次は、人形の動かし方です。村人役の人たちが人形を動かしているのを見ていると、歩き方も手の動かし方も簡単にしていたのでそんなに簡単にできるのかなあと思いました。

いよいよ出番です。私は軽い気持で動かそうとしました。しかし、人形は中腰になって動かさなければなりません。ですから、すごく疲れて手や足が動かなくなるので、最後のほうでは座ってすることがありました。他の人も人形を動かしているときは中腰になってするので、そのかっこうがおじいさんおばあさんに似ていてとってもおかしかったけど、笑うのをこらえていました。鬼と仲底力が勝負する場面がありますが、そこは一ケ所に集まってするのでますます大変です。人形を動かしている私達も一ケ所に集まってしなければなりません。ダンゴのようにくっつき、手などを伸ばしてするのですが、ころびそうになることもありました。

四月二十九日、待ちにまった学習発表会です。特に、人形劇は何回も練習したが、初めてなので不安もありました。

プログラムは、いよいよ「人形劇」になりました。最初は村人が出る番で、次は鬼の番です。鬼の番と言うと、私の番でもあります。私は、間違わないようにゆっくりしていました。

ぶじに人形劇「仲底力の鬼退治」が終わり、幕をしめると父母達の大きな拍手がいつまでも鳴り響いているなかで、「人形劇は成功したんだー。」と思いました。

三十周年記念の学習発表会で、初めての人形劇を成功させることが出来て良かったと思いました。私の持つ人形までが嬉しさで踊っているようでした。

富野校の発展を祈って

山城京子

創立三十周年おめでとうございます。

このめでたい年に巡り合い、ご父兄の皆様をはじめ地域の皆様と共々祝福できることを、この上なく嬉しく存じております。

聞くところに依りますと、富野部落は第二次世界大戦後、創立されたとの事、その後間もなく学校が誕生したことになります。ですから、部落と学校は今日まで同じ才月を歩み続けて来たことになり、部落の繁栄と学校の発展は密接な関係があると思います。そういう意味で本校が今日三十周年を迎える事が出来たのも、まさに部落の方々の生産に対する情熱と並々ならぬ努力、それと共に教育に対するご理解とご協力があればこそと感謝の念で一杯です。

しかし、ここで懸念されますことは、毎年減少の一途を辿っております過疎化現象であります。三十年を人生にたとえるならば「三十年にして立つ」といわれている通り、ようやく学校としての基礎固めが出来たというところでしょうか。

この最も大事な節目を迎えたわけですが、どのようにしてこの過疎化現象を抜け、更に繁栄、発展させていけばよいのか、それは部落の皆様に与えられた大きな課題だと思います。

この課題を背負って立つのは、ご父兄の皆様と共に今後大きな協力者となる児童、生徒の皆さんではないでしょうか。

雄大な東シナ海を背に、前には豊かな亜熱帯原生林を仰ぎ、澄みきった空気、肥沃な土地。そして小鳥のさえずり等々、恵まれた富野校の自然環境は申し分ありません。児童生徒の皆さんは、父母たちのこれ迄の苦労に応える事は勿論、このすばらしい自然に応えるためにも精一杯学習に励んで貰いたいと思います。なお小規模校のみに与えられた児童生徒と教師間の親密な心の交流を大切に、そしてやがては自分の郷土を、母校を愛する青年に成長してほしいと願ってやみません。

通勤にマイカーを持たない私は、今日も先生方の高級車に便乗させていただき、舗装道路の上を心地よく走る車窓から、朝な夕な変るすばらしい海の眺めや野山の風物を楽しんでいますが、そんな時ふと二十四、五年前、短大を出てすぐ富野校に勤めた妹の話が思い出されます。

当時、裏石垣一帯は陸の孤島ともいわれ、道がすごく悪く、交通が不便だったため妹は部落の民家に下宿していたのですが、その年、大きな台風が来て屋根が数ケ所こわされ、雨もりがひどくて一晩中眠れないまま夜を明かしたこと、母が自分の事を心配し、長い道のりを歩いて食物を届けてくれたことです。今ではちょっと考えられないような苦労があったんだなーと、妹の話を通して創立間もないあの時代の部落の方々をはじめ、教師を含めた先人達の苦労が偲ばれるのです。

時代の流れと共に島全体が変ってゆくその中にあって、今後富野はどのように変っていくのだろうか。ふとそんな事を考えさせられるこの頃です。近い将来には石垣島横断道路が出来るという

ことです。それが実現すれば、その暁には富野はその基点となる事も考えられ、明るい灯を見る思いが致します。

この栄ある三十周年にあたり、児童生徒の皆さんには決意も新たに大きな夢と希望をもって益々学業に励むようお願いすると共に、富野校の弥栄を心からお祈り申し上げます。

野やしの如き富野っ子

島袋　みつ

シーンと静まりかえった中で、縁のジュータンをしきつめた運動場と、小鳥のかわいいさえずりが私を迎えてくれた。ときおり吹いてくる若草の臭いのする風を、胸いっぱい吸いながらしばらく辺りを見回していた私は、ゴーというかすかな音にふり返ってみると、桴海於茂登の山間をぬって滝のおちるのが見えた。

「なんて静かで淋しい所だろう。」それが、二年前富野校へ来た時の初印象だった。その日は桜の木の下で、学校担任や教科担任を決めて帰った。

そして、四月八日……。子供達との対面の日……。その日から、私は淋しがるひまなど、どこにもなかった。期待と不安で胸がキューンとなるのをおさえての出勤だった。その日は、ちょうど入学式で児童生徒が五・六人式場に座っている。白いギブスを手にした子が一人、痛々しく感じられた。私は、もっと生徒が来るものと思っていましたから、行動のにぶさにいらだちはじめていた。そのとき、司会者が「新入生入場」と言ったので、ぎくっとしてあわてて生徒を数えたら、全校生徒確かに座っていたのである。私は苦笑しながら手拍子で新入生を迎えた。真新しいセーラ服の子が二人入ってくると、「待てよ。写真をとるからな」と、しばらく入口で立たせて、ハイパチリ。大きい学校ではとても見られない光景である。もう一つ私を驚かせたのは、生徒より父母の数が多いことである。どうして父母の人数が多いのか、マンモス校から来た私に分るはずはなかった。後で知ったことだが、こちらは全部落民がPTA会員とのことであった。

いく日かたった土曜日、全校朝会で指揮台に立つことになった。足元にちょこんといるだけの生徒の前で、高い指揮台で胸をはって話している自分が、なんともこっけいでしかたがなかった。中学生四人、小学生五人という人数はあまりにも少なすぎ、私は復雑な気持であった。

あの日から、一年・二年と苦楽を共にしているうちに、富野っ子達のすばらしさも次第に分ってくるようになった。くったくのない明るさ、つらい仕事もみんなで力を合わせてやりとげる強い精神力等々たくさんあるが、保健係をしている私にとって、一番すばらしいと感じたことは、かぜやけがで薬をもらう子がいなかった事である。この二年間で休んだ子といえばかぜで二人、歯痛で一人・骨折治療で一人ぐらいである。その実態から、富野っ子は強い！と感心させられる。

それは、どんな嵐にも絶え、根をしっかりはって生き続けたあの野ヤシと、台風・干魃と自然のいたずらにもめげず、土地を守り、村を育ててこられた部落民の並々ならぬ努力と心の強さが、知らず知らずのうちにこのような強い子供達を、育てあげたのだ

と思う。

このたくましい体と、春のようなあたたかく明るい心は、富野っ子としてのほこりであり、生涯の宝物になるであろう。

そして大人になったとき、やはり強い体・明るく温かい心の子を育てていくでしょう。その頃は、富野校も人数が増えにぎやかになっていると思う。

そんな日の来るのを祈りつつ、私は今日もチョークを握っている。

浮海の印象

新垣　精一

富野小中学校に勤務してやがて一年になろうとしている。私の教職経験の中で、俗に島内へき地校といわれる地域への勤務がなかったので、去った人事移動では是非そういう学校へ転勤させてくれることを希望していた。なぜなら、そういう所が好きで私の性に合っているからだ。こちらに勤務するまでは、富野中学校に対する認識にはっきりしたものがなく、小さな学校だというイメージはあったが、西廻りで島内を一周した時、吉原・米原富野の所在に確かなものはなかった。

着任式のとき、校長の紹介を受け指揮台に立ったとき、目の前に山があってそのすそ野に運動場と校舎があり、緑一色の中で小中合せて九名の生徒が横一列に体操体形の間隔で並んでいた。私は本土のある小さな山間地の分教場に赴任したような感じであった。それは辺りがあまりにも静かであったからである。まさに大自然の中に学校がある。私は爽快であり、こういう学校にあと何年間か勤務が出来ることが嬉しくてならなかった。

こちらの学校に勤務になったとき、ちょっと気になったのは、市街地から見ると於茂登岳の裏にあり、遠隔地であり通勤が大変だということである。しかし道路は舗装され、所要時間三十五分程であり、学校までの道のりが快適である。

山バレー渓谷に差し掛かる頃から山がせまり、さわやかな風に変ってくる。米原に群生するヤエヤマヤシ、道路ぞいや谷間に見られるヒカゲヘゴ、まさに八重山が亜熱帯地域である証しである。海を見ると、野底崎から川平石崎にかけての礁脈に打ち寄せる白波がますます辺境の地を感じさせる。そんな山や海を見ていると、「私は、富野校に勤めることができて本当に良かった」と、思うのである。

夏は、山バレーの浜で比嘉君・真栄里君・波平先生の四人でキャンプをし、グルクン釣りをして楽しんだし、そこの海を潜り熱帯魚の群舞する海の壮観さと美しさもみた。翌日は台風接近のため海が荒れる北風の中を、山バレーから米原まで岸づたいに三人でボートを引っぱっていった事もあったし、学校の前の滝を川づたいに登り、その滝の上から学校を遠望したこともある。日夜の穏やかな海上をイカ釣りをして、三人で仲よく一匹づつ釣ったこともあった。猪の罠を仕掛け、（まだ一度もかからない）、山にも通ったし、コノハズクや虫の鳴く夜の静寂の宿舎で勉強したこともある。

桴海は理科教材の豊富な所である。野鳥はいるし、混虫も多い。

カエルやヘビもよく出現する。こちらでは、それらの動物の生態を観察させてもらっている。
時たま宿舎で泊まることがあるが、その時に飲む酒の味もまた格別である。
三月には二人の中学生も卒業し、桴海の山・海を散策する中間がいなくなり淋しくなるが、こちらに勤務している間は桴海のよさを満喫したいと思っている。

勉強嫌い・勉強好き

波平長吉

勉強が嫌いになるのは

家庭にあっては三人の子供の親（一人は中学三年）、職場にあっては中学二年・三年生を受け持つ者として、これまでの経験から自分なりに考えた事をほんの少し記してみたい。
とくに中学三年生の受験期ともなると、どうしても合格点に達するだけの力をつけてやろうと、こちらも必死です。ところで、そうした指導の中で気がついた事があります。
それは、数字の勉強でとくに気づきます。自信がなくて答えを書くと、必ずチラリと私の顔を見ます。答えはあっているのに、間違っているのではないかという感情が離れないからです。そして、ちょっと肯定的な顔をしてやると、ほっとして次へ進みます。
その反対に、こっちが首をかしげたりすると、あわてて消しゴムで消してしまいます。その時、私は「間違った計算はそのままにしておきなさい。その方が次の計算と比較した時、まちがったところが良く分るだろう。」というのですが、注意をしない限り消してしまうことが多いです。
なにか、間違えることをおそれているように見えるのです。きっとそれまでの長い期間の中で、間違えては怒鳴られ、皮肉られつづけてきたことの結果なのでしょう。その積み重ねが、素直に間違えることのできない人格を作ってしまったのではないでしょうか。こんなところに、子供を勉強嫌いにさせてる原因のひとつがあるように、私は思うのです。
間違える事が恐い。だから勉強は嫌い――。これが勉強嫌いの原因の最大のもののように思います。反対に、間違えることはすばらしい事でもあるということを指導していれば、勉強嫌いはなくなるように思います。

勉強を好きにするには

大切なことは、どんな時でも子供達の興味や関心、発見の成長に心から共鳴し、次への発展に対して、援助してあげることが一番大切なことではないかと思うのです。せっかくの興味や関心や発見に知らん顔したり〝うるさい〟と怒鳴ったりしたのでは、未知の世界に挑む、学習意欲の芽を摘み取ることになるわけです。
ほんらい、頭脳というものは、頭の中の操作やつめこみだけで発達するのではなく、自からの生活全体すなわち、体全体でする成功や失敗、その中での喜び、悲しみ、工夫が頭脳の働きを発達させると言われています。
したがって私達大人は、常に子供達の興味や関心や発見に気を配

り、機会をのがさず、子供達の生活全体における工夫と挑むことの好きな子供をつくるのです。その子が、あまり勉強好きでないにしても、毎日の生活が意欲的に生活していたら、必ずはずみのつく事を期待して、待ってやることも大切な事ではないかと思います。

小さな花にも

貝敷勤子

山・山・山……。

「あー。山に押しつぶされそう」と連発していたのが赴任当時の私です。あんなに圧迫感しかなかった山が、二年たった今では私の心を支えてくれるすばらしい力の持ち主と化したのだから不思議です。

五月二日、亮君が恥かしそうにもじもじしながら、「はい」と一枚の紙を渡しました。「ありがとう。これなにかしら?」と言いながら見ると、それはかわいらしい手造りのこいのぼり集会への案内状でした。下書きのえんぴつのあとや、ボールペンのあと、色えんぴつのあとなどから、子供達の気持がひしひしと伝わり、次第に胸がジーンとなりました。

小学生ってなんて可愛いいんだろう。ここにはなんてすばらしい触れ合いがあるのだろう。私は可愛いい案内状をもらうのも、こいのぼり集会へ参加するのも始めてなので、集会の日が待ち遠しくてなりませんでした。

いよいよ「こいのぼり集会」司会、ゲーム係は皆小学生です。案内を受けた中学生は、心よくそれに応じました。照れくさそうにゲームする男生徒、ちょっぴりきどった女生徒、しかし、誰もが楽しそうにしています。

このように、小中併置校では、中学生が小学校の行事に参加することもあるし、小学生が背のびして中学校の行事に参加する事もあり、触れ合いを多くすることによって、心の絆もしっかりと結ばれ、それが知らず知らずのうちに「人を思いやる心」を育てたのではないでしょうか。

人と人との触れ合いの少なくなった昨今、非行はますますエスカレートし、新聞やテレビ・ラジオは毎日それらを報道しています。学校内暴力・家庭内暴力・恐喝等その波は次第に輪を広げ、根をはっています。これらのことは、もはや他人のことだと手をこまないで見ていられない現状です。このように悪の反乱している中で、正しく生きぬくには、物を見る目（判断）それに強い意志・人を思いやる心がなければならないと思います。

富野校の子供達には「人を思いやる心」が充分にあるのだから、それをいつまでも大事にし、合わせて「物を見る目・強い意志」を育てて欲しいと思います。

優しい子供達や先生方と出会って二年。今ではどんな小さな花や虫にも、思いやりがあるのだという事を知りました。ですからあんなに圧迫感しか受けなかったあの山でさえ、私を抱み励ましているようにさえ思えるのです。

富野校でのすばらしい出会いは、私にとってとてもとてもステ

キな人生の一コマになりました。本当に有難うございました。

九月の朝

石垣俊子

社会人として第一歩を踏み出した富野校は、私にとって第二の母校ともいえます。

本校に勤務なさった先生方や、素直な明るい子供達との出会いで、私も人間として成長しました。

「仕事が仕事を教えるのだよ。」と先生方に励まされながら学校事務の仕事に責任を負い、緊張していた私にとって職場の家庭的な温かい雰囲気や、自然環境に恵まれたさわやかさは、何よりの心の支えでした。

縁の中でひときわ目立った校舎は、復帰前からこれまで地域の人々の心のよりどころであり、文化センター的役割を果たして来たことを思うと、なつかしく親しみさえ覚えました。

復帰特別借置による校舎の改築で、近代的モダンな校舎に生れ変わりましたが、私にとって旧校舎は今日の私をはぐくんでくれただけに、愛着があり温かみがありました。

これまで本校を卒業したみなさんや、現在勉学に励んでいる子供達の真剣なまなざしに映えた黒板、いろいろな足跡を記して来た廊下、やわらかな手でなでられ、てかてかになっていた壁、たとえ赤さびた鉄筋のむきでた柱であっても、旧校舎がこれまで富野校の教育の殿堂であったことを思うとき、撤去された日は、自分の体の一部分が削り取られてゆくようでいたたまれなく落ちつかない一日でした。

戦後、交通の不便なきびしい中をのり越えて富野校の教育を守り育ててきたことに、「ありがとう。ご苦労様でした」と心の中で感謝の気持をこめ、別れを告げました。

九月の朝、太陽のまぶしい校庭で、桴海於茂登岳を背にして並ぶ十三名の子供達の前でふるえながら着任の挨拶をした日の事がついこの前のようです。

あれから四年余りの月日が流れ、今年は卒業生を送り出す年を迎えました。少人数の子供達だけに、卒業とはいえ一人でも学校を去られる淋しさと、旅立たせる喜びとが重なって、心の中を妙な空気が吹き抜けていく今日この頃です。

事務職という立場から、子供達とのふれ合う機会は少ないが、運動場や学習発表会等で、準備するものも演ずるものもすべて一人ひとりの小さな力と心がひとつになって頑張っているさまを見ながら、地域ＰＴＡの皆さんが造ってくれた手造りの舞台で、それを発表する最高の日には、「がんばって」「よくやったぞ」「偉い」と毎年の行事には、拍手を送り励ましてきました。市街地の子供らに負けないたくましさ、みんなで協力して創り出す喜びを味わうことの出来た私達にとって、それを支えてきた旧校舎は卒業生、在校生、地域の人々のシンボルであり交流の場でした。そして本校ならではのユニークな学校行事は、地域外の人々からも高く評価されています。

この輝かしい歴史と伝統をもつ本校は、今年で三十年の節目に

ふさわしく、これからの富野校の歴史を受け継ぎ、発展を象徴するかのようです。

たくさんの事を学ぶことができ、すばらしい先生方、素直な明るい子供達、地域の皆様方のお力ぞえで楽しい毎日を過ごす事ができた事は、私の大きな宝になりました。

山の中に明るい声がこだまするところ。
開拓の汗と槌音が響くところ。
桴海の地。
そこにそびえ建つ富野校。
私が社会人として出発したゆかりの地。
私を育ててくれた職場。
第二の母校、富野校よ。
あなたの三十年という歴史の中に私の存在が記されたことに
誇りと喜びでいっぱいです。
おめでとう富野校。
栄えあれ富野校。

三十年を振り返って！

知花静枝

三十年という年月は、長いようでもあり、また時の流れはまたたく間に去って行ったようにも思われます。私達にとって、この三十年間は、感概無量でありました。

昭和二十七年、道という道もなく、うっそうたるジャングルにおおわれ、マラリアの本拠地といわれたこの末開地に、一棟の教室が建てられてから、早三十年が経ったわけです。

今日の本校を思いますと、当時の様子を知る者にとっては、信じられない思いがします。本校が川平分校として創立された当時は、机・腰掛け・教具とてないありさまで、先生方と生徒が、共に学校整備のための涙ぐましい努力を数々やりながら、教育の灯をともし、子供達の教育に絶えまない活動を続けてこられたお蔭で年々発展して参りました。

本校を卒業していった多くの人々は、今日、立派な社会人として社会の各分野において活躍しております。その方達を見ていますと、本校がこれ迄果してきた役割の大きさに驚かされます。これからも、本校の果す役割は増すことはあれ、決して少なくなる事はないでありましょう。

しかし、若者の流出により、次の時代を担う者がなく、また、復帰の混乱と、干魃・台風などにより、多くの方々がこの地を去っていきました。現在本校には、数年前の面影はもうはとんどありません。喜びに胸をふくらませた入学式も、三年前からは新入生が一人もなくて出来ません。

このままでは、廃校になるのも目の前だということであります。此のような現状の中で三十周年を迎えることを残念にも思い、また淋しく感じるのでもあります。

今後とも富野校が発展し続ける事を祈りながら、筆を置きたいと思います。

与えられしものに感謝して

又吉　カツ子

八重山はヤキイ（マラリア）の島と言われていたので、私に移民の話が出た時、母は絶対に許さず、もしどうしても行くのなら親子の縁を切ると厳しい態度だった。この反対をおしきって移民をするには、長い時間と勇気が必要でした。

末熟で何ひとつ経験のないままに、現在の地、米原に入植したのです。当時の八重山は、港らしい港もなく私達は現在の米原の北海沖に、今はなき「みどり丸」という小さな客船から、干潮になるのを待って、浅瀬をたよって上陸しました。海上から島を見ると、高い山が重なり合い、山また山の波が続いて人間が住めるとは思えないほどでした。幼い頃読んだ本の中に、ジャングルという言葉があったが、まさにそのジャングルの中に自分が住もうとは夢ほどにも見なかったことです。結婚したばかりの私がここへ来て、これから自分はどうすればよいのか、子供の教育や食糧問題など我身に重くのしかかり、後戻りすることも、前進することもできず途方にくれ、母の反対したのも無理ない事だと、母の言葉や顔を思い浮かべ、涙を流すこともしばしばでした。

しかし、成り行きにまかせるより仕方がなく、毎日が不安で闇の中をさまよい、一日が終われば胸をなでおろし、今日も生きて無事すごせたことに感謝したものでした。生徒のいる先輩達は、校舎造りと開拓が日課のようでした。校舎といってもカヤブキの仮校舎ですから、台風がくれば一夜にして失なわれ、また翌日から校舎作りということをくり返した末、各方面から文化の波は押しよせられ、富野校にも鉄筋コンクリートの校舎が建てられました。でも民家はまだまだカヤブキが多く、台風や旱魃と度重なる災害と交通の不便さに絶えかねて、汗水流して求めた土地も学校もすてて、都会や故郷へと引き揚げる方達が続出しました。

私の頭から、今なお消えないことの一つに末娘の事があります。ある日、娘は悲しい顔で「皆な転校して私が中学へ上がる時には女生徒は私一人しか残らないよ。母さん私達も読谷に引き揚げよう」と言った。いよいよ自分にも決断する時が来たのだ。娘にだけは自分のような苦しみを味わせたくない！そう思うと、胸の底からこみ上げてくるのを押さえきれず、娘に返す言葉さえなかったのです。娘のためには……。

そう思っても私には引き揚げる費用もなく、たとえ行けたとしても住める所もないのだから、心を鬼にして「男の中に女一人なんでいやなの。男も女も変りはない！貴女も男のように強くなるんだ。」と励ましにもならない言葉を言ったのです。

早く道路も出来て、交通さえ便利になればいいのにとつくづく思いました。いろいろな思いをいだきながら、六名の子供達は本校を巣立ち、実社会に出る事ができましたことは、常になぐさめ励まし、御指導してくださいました先生方や、先輩方のお蔭だと心から感謝申し上げます。

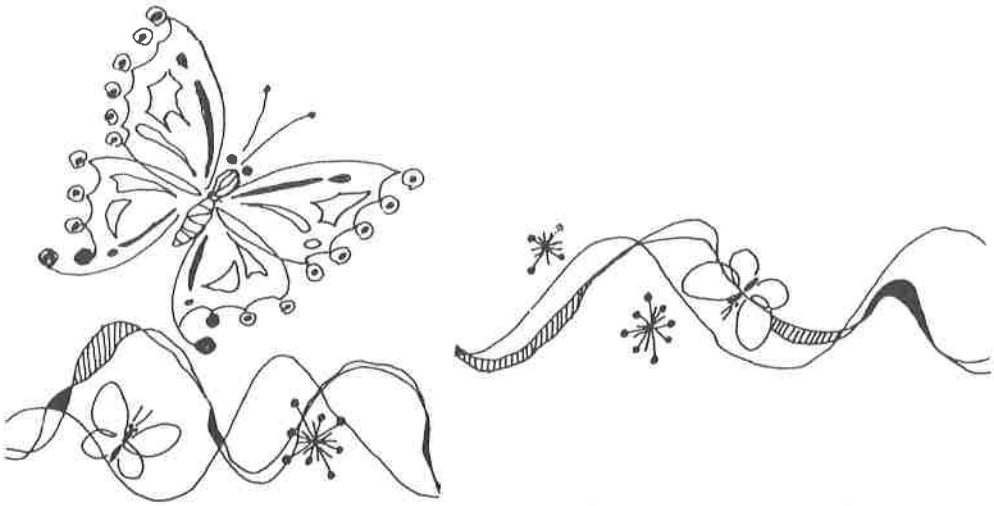
また、私には公務員という立派な仕事が与えられ、あの苦しかった当時の事を思い出すときに、苦あれば楽ありと昔の人はよく

教えて下さったものだと、つくづく感じさせられます。

三十年といえば、昔といわれますが私には悪夢からさめた昨今のように思います。

今は、校庭も小鳥のたわむれる静かな風景で、生徒数も少ないのですが、子供達を御指導なされる先生方は、家庭教師のように子供一人びとりの特徴をのばすために、一身ふらんに頑張っておられます。ですから、富野校で学ぶ子供達は本当に幸せだと思います。

富野校を去って行った若者達も、自分の子供にものどかな校庭の中で学ぶ機会を与えて下さい。

古い校舎から新しいモダンな校舎へと変わり、生徒達も健全な心と体のあたたかい心の持ち主になると確信いたします。

三十周年を記して復活する事を心から祈りつつ、ここを去って行った若者達が戻って来ることを期待します。